

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：34311

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24860064

研究課題名(和文) 歌合・通過儀礼を通してみた寝殿造の復原的研究 - 皇后・内親王の行事を中心に -

研究課題名(英文) Studies of Reconstruction of the Shinden-Zukuri Through Poetry Contests and the Rites of Passage : Focusing on Rituals Conducted by Empresses and Princesses in the late Heian Period

研究代表者

赤澤 真理 (AKAZAWA, Mari)

同志社女子大学・生活科学部・助教

研究者番号：60509032

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、平安時代の皇后・内親王が参加した行事に着目し、調度や装束による舗設を含めた催しの空間を明らかにする。特に、歌合及び御遊(楽奏)に着目し、『うつほ物語』『源氏物語』『栄花物語』等の王朝文学と古記録の記述を抽出した。皇后・内親王・女房は、寝殿の母屋及び廂に着座し、御簾・屏風・几帳・女房装束の打出により行事の空間を演出した。南廂及び渡殿に公卿が、簀子に殿上人が着座する。打出は、当初は、行事時に高貴な女性に仕える女房の座所周辺を装飾したものが、11世紀後半から12世紀には、公卿の儀礼空間や使者を迎える妻戸等に設置される。すなわち、打出の舗設としての機能や故実が院政期に確立した。

研究成果の概要(英文)：This study examines the construction of interior space of rituals conducted by empresses, princesses in the late Heian period, including the furnishing, decorations and women's costumes. In particular, it focuses on poetry contents and music performances described in aristocrats' dairies and literature, such as Tale of Utsuho, Tale of Genji, and Tale of Eiga. The examination reveals that empresses, princesses and court ladies sit in the center (moya) and the surrounding area (hisashi) of the shinden-zukuri palaces, marking the ritual space with blinds (misu), screens (byobu), curtains (kicho), and uchi-ide costumes. The high-ranking male officials (kugyo) sit on the southern hisashi and corridors. Moreover, originally used as ornaments for empresses and court ladies' seating places, the uchi-ide also used in male officials' ritual spaces. This change shows the function of uchi-ide as interior decoration established during the time from late 11th century to 12th century.

研究分野：日本住宅史

科研費の分科・細目：建築学 建築史・意匠

キーワード：寝殿造 装束 舗設 打出 歌合 御遊 うつほ物語 女房

1. 研究開始当初の背景

古代寝殿造は、貴族社会の儀式空間として、あるいは、妻問婚等の家族形態により、その特質や変容過程が明らかにされてきた。いっぽう、『源氏物語』等に示される王朝文化の担い手であった皇后・内親王とその女房がいかなる場所で儀式に参加し、生活したかについての検討は少ない。皇后・内親王が参加した行事は、『源氏物語』を中心に、『栄花物語』等の王朝文学に豊富な記述がある。本研究は、文学・古記録・絵巻等に示された皇后・内親王が参加した歌合や御遊等の遊興空間の復原を通して、従来に着目されてこなかった寝殿造の多様な使い方を明らかにすることを目的に、研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、下記の2点である。

- (1) 皇后・内親王は、行事においてどのように着座し、公卿・殿上人・楽人達といかに座を共有したのかを明らかにする。特に、女性が参加することが可能であった行事として、歌合や御遊（楽奏）の場に注目する。
- (2) 皇后・内親王を主催者とする行事における、調度や装束等で演出された舗設の空間を明らかにする。特に、従来に行事時の女性の座所として考えられがちであった、女房装束を使用した装飾「打出」による空間演出方法とその変遷を究明する。

3. 研究の方法

本研究は、下記の手順で研究を推進した。

- (1) 皇后・内親王が参加した主な行事には、歌合と御遊（楽奏）がある。歌合の場の検討は、著者自身の研究成果があり（「歌合の場—女房の座を視点として—」陽明文庫王朝和歌集影、pp.180～187、2012年）、これを踏まえ、『うつほ物語』・『源氏物語』・『栄花物語』と周辺の古記録に記された御遊の空間を抽出した。

(2) (1)の作業の中で、女君（后・姫君・女房）・男君（公卿・殿上人）・楽人が邸内にいかに着座したかを抽出する。

(3) 行事の空間が詳細に記される場面に絞り、平面図に図示し、復元的に検討する。

(4) 女房装束による打出に着目し、平安時代後期から院政期にかけての文学と古記録を、新編古典文学全集や東京大学史料編纂所のデータベースにより抽出し、打出の記述を網羅的に抽出する。

(5) 打出がなされた行事や邸内の領域を抽出し、打出の機能や設置場所の変遷過程を検討する。また、記主の視点から、打出の社会的意味を明らかにする。

(6) (1)・(2)・(3)から、御遊の空間における皇后・内親王、公卿、楽人等の座所の領域を明らかにし、論文により公開する。

(7) (4)・(5)から、女房装束の打出の成立と変遷を明らかにし、論文により公開する。

4. 研究成果

本研究の具体的な成果を下記にまとめる。

(1) 御遊（楽奏）の場の復原

平安時代の御遊の空間に着目し、寝殿造の多様な使い方の分析を試みた。特に10世紀後半から11世紀に記された『うつほ物語』・『源氏物語』・『栄花物語』と周辺の古記録に示された記述を抽出した。御遊は、戸外・内裏・院御所・貴族邸宅・釣殿等で催された。楽人が歌合・御遊に参加した際は、階の周囲の簀子に殿上人が座り、庭に楽人が着座した。女性が御遊に参加・聴講した際は、寝殿の母屋及び廂に屏風や几帳を立て着座し、南廂及び渡殿に公卿、簀子に殿上人が座った。以上の成果は、「楽奏の場としての平安建築—『うつほ物語』『源氏物語』に示された御遊の空間構成」に公開した。

(2) 京極殿のいぬ宮の演奏会の復原

大規模に開催された楽奏の空間として、『うつほ物語』の最終部、楼の上、上巻に記

述される京極殿のいぬ宮の演奏会の想定平面図を作成した。具体的には、寝殿西面は、母屋に嵯峨院の一族の空間で、西廂に嵯峨院妻である大後の宮と娘達が座る。北廂は、嵯峨院娘の正頼妻とその娘達が座る。寝殿の東面は、朱雀院（嵯峨院の子）の一族の空間であり、母屋の東面に朱雀院、東廂に朱雀院の妻子である仁寿殿の女御と女一宮が座る。母屋の東面で、尚侍といぬ宮が演奏した。南廂は、院の親王達が着座した。すなわち、二人の院が座る寝殿の母屋を最上位とし、東に対して西面を上位とした。本場面は、登場人物の位階や家族関係を踏まえた場の設定がなされている。「御供の人までは、居るべき所なし」、「あきたる方なきをいかがせむ」、「一つにみな狭げなりと御覧じて」、「廂に居たまへる人々、狭くて、人氣に暑かはしく覚えたまへる」等の記述は、当時の住宅の使い方を理解する上で貴重である。『うつほ物語』は本場面以外においても、居住に関わる記述が豊富であり、今後は、『源氏物語』等の住宅との比較検討を推進し、歴史的な変遷を究明する。成果は、「京極殿におけるいぬ宮演奏会の復原—『うつほ物語』の居住史的研究—」において発表予定である。

(3) 打出の成立と変遷の解明

后・女院・内親王による行事の空間演出である、女房装束の打出に着目し、『源氏物語』『うつほ物語』『栄花物語』等の物語・古記録・絵巻物を検討した。打出は、当初は、姿の美しい女房が着用する装束を自然に出した状況から発生し、几帳に装束を2具架けて出す打出として成立した可能性が高い。その使用方法は、下記に整理できる。①行事時(立后・算賀・仏事・祭等)に女院・後の座所周辺を装飾する、②拝礼・通過儀礼の空間を装飾する、③御使を迎える妻戸口を装飾する。さらに、(A)女房が実際に着用し装束を出す、(B)几帳にかけて設置する(女房は不在)、が抽出できる。院政期における古記録では、多

くが(B)となる。すなわち、11世紀後半から12世紀には、打出による舗設が確立したことが指摘できる。これらの成果は、「女房装束の打出にみる寝殿造のしつらい—『栄花物語』を中心に—」、「『中右記』にみる打出による空間演出とその性格—女房装束の打出にみる寝殿造のしつらい(2)—」、「女房装束の打出と寝殿造における女性の座所」等に口頭発表し、論文に公開する予定である。

(4) 打出が成立した社会的背景

打出は、四方拝・御八講初日・服喪等には、忌避されている。特に、『中右記』・『玉葉』には、記主の公卿の視点から女性の座所の打出に対する批判が記され、特に出自が低い国母の打出に非難がある。打出は、平家一門など新たな階層の台頭に基く、王朝文化の変容により、発展・拡大したと予見される。また、院政期の日記には、晴の際の打出(袖・褌)と押出(袖)の違いを区別しようとする意図が見出され、打出の故実や作法が確立していく過程が窺える。院政期から鎌倉時代前期の社会的背景を基に、打出が発展した要因について、(3)の成果とともに、論文に公開する予定である。

今後は、皇后・内親王・女院が参加した行事の空間と生活様式を、天皇・院・公卿等の公的な儀式と比較し、院政期から鎌倉時代への変化を踏まえることで、寝殿造の空間の全体像と変容過程を検討し、住宅史研究に寄与していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

赤澤真理、楽奏の場としての平安建築—『うつほ物語』『源氏物語』に示された御遊の空間構成—、アジア遊学 東アジアと音楽文化—物語と交流と—、勉誠出版、pp. 211~226、2014年1月

[学会発表] (計 4 件)

- ① 赤澤真理、京極殿におけるいぬ宮演奏会の復原—『うつほ物語』の居住史的研究—日本建築学会学術講演(近畿) F-2、掲載予定、2014年9月(於・神戸大学)
- ② 赤澤真理、女房装束の打出と寝殿造における女性の座所、平安京の〈居住と住宅〉研究会、2014年1月(於・京都大学)
- ③ 赤澤真理、『中右記』にみる打出による空間演出とその性格—女房装束の打出にみる寝殿造のしつらい(2)—、日本建築学会学術講演(北海道) F-2、pp. 303~304、2013年8月(於・北海道大学)
- ④ 赤澤真理、女房装束の打出にみる寝殿造のしつらい—『栄花物語』を中心に—、日本建築学会近畿支部研究発表会、pp. 757~760、2013年6月(於・大阪工業技術専門学校)

[その他] (計 1 件)

同志社女子大学研究者データベース

http://research-db.dwc.doshisha.ac.jp/rd/html/japanese/researchersHtml/3455/3455_Researcher.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤澤 真理 (AKAZAWA Mari)

同志社女子大学 生活科学部 助教

研究者番号：60509032

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし